
とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

座標移動は強いと思います

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるもしもの座標移動^{↑ポイント}

【Nコード】

N4531Y

【作者名】

座標移動は強いと思います

【あらすじ】

結標さんに憑依した人のお話です。

結標さんが

かなりチート化したり原作のストーリーが変わったりしています。ご注意ください。

憑依したのは座標移動

みなさんは、もし禁書の世界のキャラに憑依出来るとしたらどのキャラを選ぶ？

私だったら右方のフィアンマとか一方通行辺りに憑依したいと思う。だって無双したいもん。

ああ、垣根や軍覇辺りもいいかも。アイツ等無限の可能性があるイメージあるし。

「……むすじめ あわき結標淡希。という事は能力はムフポイント座標移動か……微妙」

鏡に映る長い赤毛をお下げ髪のように耳より低い位置で左右に結つて、背中の方へ流している女の子を見てそう確信した。

しかし、服装は原作の痴女みたいなサラシミニス力では無く、普通の白い半袖のカッターシャツにプリーツスカートという極普通の服装だった。

……だが、これどこの制服？ 原作の結標が所属する霧ヶ丘の制服ではないが……もしかしたら中学生時代の結標なのだろうか。

まあそれはともかく。

座標移動、か。弱い能力では無いと思うのだが、なんだかなあ。

上手く使えばかなり強力な能力だが、如何せん一方通行や未元物質みたいな派手さはないし、正面突破じゃおらあああ！！があまり出来そうにない能力なんだよね。

しかし……無能力者とかに憑依しちゃうより遙かにましか。いや、上条さんは例外だけだね。

「とりあえず能力使ってみますか」

私は鏡から一メートル程離れた位置に落ちている学生鞆に目を向ける。

手のひらを広げ、鞆を掴む用意をする。

「来い、鞆！」

無音で鞆が私の顔の前十センチ前くらいに空間移動してきた。

「うおっと！」

落ちてくる鞆を慌てて両手でキャッチする。

どうやらまだ座標の指定が甘いようだ。

まだ中学生の頃の結標だし、演算能力が足りないのかな。それにしても、部屋の中だけでは情報量が少なすぎる。

「外に出てみるか」

学生寮を出ると、通りにちらほら私と同じ制服を来ている人達が歩いているのが確認出来た。

飾りつきの無い黒い折り畳み式の携帯で時刻を確認してみると、7:58と表示されている。成る程、今は登校時間のようだ。学校までどれくらいの距離があるか知らないけど。

とりあえず登校してる子達に着いていこう。

「あいたっ！」

「いよう、優等生！」

突然誰かに背中を思い切り叩かれたようだ。

かなりイラッとした私はソイツを思い切り睨み付ける。

「いつもは三十分前には学校に来てるのに今日は遅いじゃ……あれ、何で怒ってるの？」

茶髪でややツンツンヘアの男子はこちらを見てキョトンとした顔をしていた。

うん、誰だコイツ？

憑依したのは座標移動（後書き）

ちよいと女が主人公の小説も書きたくなったので書いてみました。
あと、チート結標さんも書きたいというのもあります

今の周囲の状況を簡単に把握しました

とりあえず今確認出来ている事を述べよう。

まず、私が通う中学は朝陽南中学あさひみなみという第七学区という特殊な能力を開発する事に念を置いている学校らしい。

将来進学するであろう霧ヶ丘に似たようなところがあるな。あそこも特殊な能力を開発させる学校だったはず。

次に私の能力の強度は大能力者《レベル4》だ。これはクラスメイトから教えてもらった。

という事は今の時点で自身をテレポさせる事も可能っぽいね。帰宅する時やってみようかな。

今日学校行って分かった主な事はこれくらいか。

ね……あ、今朝に私に無礼な挨拶をかましやがった男の名は霧ヶ峰きりがみ優ねというらしい。

原作にもアニメにもこんな奴はいなかった。まあ原作にもアニメにも出てないだけで結標淡希と交流がある奴は結構いるだろう。

今はもう全ての授業終わってホームルームに担任の教師が来るのを待っているが、霧ヶ峰は周りのクラスメイトとはしゃいでいる。

コイツはどうやらクラスのムードメーカーみたいな存在らしい。

それにしても常盤台中学とかに通いたかったなあ。

あ、でも美琴や黒子が入学する前に卒業しちゃうね。けど、心理メンタ掌握リアウトの食蜂さんにはギリギリ会えるな。

ん、先生が来たようだ。

「やあ。結標君」

ホームルームが終わり、放課後イベントも特に起こらず、校門を出た所で白衣を着た男に声をかけられた。

学園都市で白衣とか研究者以外に考えられないな。

「明日は身体検査システムスキャンの日だ。悪いけど能力の精度を確かめるために研究所に来てもらうよ」

身体検査が明日あるのは知っていたが、私こと結標淡希がどこかの研究所に所属していたってのは知らなかったな。

まあ座標移動ってただでさえ珍しい空間移動系列の中でも貴重な存在らしいから、専門の研究所があってもおかしくはない。

「ああ。そうだったわね。研究所へは徒歩で移動出来るの？」
「どうでも良い事だが私は会話する時は原作の結標と同じ口調で話す事を心掛けている。」

特に意味は無い。ただ、演じるのがなんとなく楽しいだけ。

「結標君、今日は体調がよろしく無いのかい？ 君の能力で研究所まで行くに決まってるだろ」

研究者っぽい男は怪訝な顔をしながら遠くに浮かんでいる赤いバールーンを指差す。

「えっ」

「さあ研究所の目印のバールーンまで僕と君自身を座標移動で移動しよう……どうした？ まさか本当に具合悪い？」

「いや、大丈夫よ。あはは」

多分これって能力を使いこなす練習か何かだよな。

私を送迎のパシリに使うためじゃないよね？

……ま、いいか。どうせ帰宅する時に能力使っつて決めてたしね。

「行くわよ」

研究者の男に肩に手を置く。

通行中の人間とかに間違えて転移したりするとおぞましいオブリエが出来ちゃうから、まずは障害物が少ない上空にテレポするかね。真上に障害物は無し、よし、まずは上空八十メートルくらいに座標移動！

「お、おおおっ」

すげー！ あっさりとテレポできちゃったよ。

見る！ 人間がゴミのようだ！ ……うわっ、研究者の男がこっち不審な目で見てるよ。

これ以上変な目を向けられないためにもさっさと研究所まで行くか。

お次は前方へまた八十メートル！

(よしよし)

先程よりバルーンが大きく見えるって事は今度も成功したって事だ。

座標移動を繰り返している内にバルーンの目の前くらいまで移動出来たので、次に地面の三十センチくらい上に転移する。誤って地面に足埋めるわけにはいかないからね。

「お疲れ様。いつもより精度とか能力を使う間隔が短くなっているんじゃないか？」

「あら、そうかしら」

「君は自分の能力を恐れている縁があったからな……少しはそれが薄れてきたのかな？」

「……………」

うーむ。原作の結標はそうだったかもしれないが、私は結標であつて結標でない人物みたいな人間だからなあ。

ぶつちやけ能力なんて私はただの便利な道具としか思つてない。

「いけない事聞いちゃったかな？」

「別に。気にしなくていいわ」

「そうかい。じゃあ行こうか、主任のところへ」

主任か。座標移動開発の主任の事なんだろうが、変な人物だったら嫌ですねー。

つつか、今気付いたがこの研究所は建物は平凡だが敷地はかなり広いな。

なんか期待されてるみたいでプレッシャーががが。

「行こうか」

研究者の男は先導して研究所内に入つていった。私はいつの間にか口の中に溜まつていた唾を飲み込み、彼の後に続いた。

今の周囲の状況を簡単に把握しました（後書き）

主人公は結構お気楽な人だから結構メンタル強いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4531y/>

とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

2011年11月16日18時55分発行